

---

# 研 究 集 会 報 告

第2回（6月25日）

口頭伝達

## —記号論的説明の限界—

井谷 玲子

伝達は二つの情報装置を必要とするプロセスであり、一つの装置がもう一つの装置の物理的環境を変えようとするものである。その結果、受信側の装置は送信側に既にあった情報、又それに似た情報を再生することになる。例えば口頭伝達において話者は聞き手の音響環境を変え、その結果話者の伝えたかった思考と似た思考を聞き手は得ることになる。ここでの問題は、二つの全く異なる刺激、即ち音パターンという発話と、それが表わす話者の思考が如何にして必要なだけ類似したものになるのかという問題である。アリストテレスの時代から現代記号論に至るまで全ての伝達理論はコードモデルという一つのモデルに基づいてきた。コードというのは内部メッセージを外部信号（シグナル）と結びつけ、生物であれ機械であれ二つの情報処理装置が伝達できるようにするものである。言語発話は人間の最も重要な伝達手段であるが、発話が信号であり、話者の思考をコード化したものであると考えられる。しかしながら、あいまい性解決、省略部分又意味的不完全分の完成、指示物同定発話内効力の決定、比喩表現認識、暗示的内容回復等、発話解釈というのが、発話という信号の解読以上を要するのは明白な事実である。もちろん言語は文、発話の音声表記と意味表記を対にするコードであるとみなせるが、意味表記と実際発話により伝えられる話者の思考の間にはギャップがあり、そのギャップは、コード解読ではなく、推論というプロセスによって埋められるのである。ここで語用論的課題である推論プロセスの解明が大切な研究テーマとなったのである。

参考文献

Wilson and Sperber (1987) 'Precis of Relevance : Communication and cognition' Behavioural and Brain Sciences 697-754

---